
氷姫 『もうひとつの嘆き姫』

れんじょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷姫 『もうひとつの嘆き姫』

【Nコード】

N1346V

【作者名】

れんじょう

【あらすじ】

情け深い嘆き姫と氷のように心が無い氷姫。どうして氷姫が氷のように冷たくなったのか、そして嘆き姫の結末は？

すでに完結している『嘆き姫』から発展したお話です。

『嘆き姫』と重複する部分がありますが、全く違う話になります。

よろしくお願いいたします。

第一夜（前書き）

ちよつと残酷でちよつと悲しいお話です。
苦手な方はご遠慮ください。

第一夜

ある小さな小さな国に『嘆き姫』と呼ばれるお姫様と『氷姫』と呼ばれる妹姫がおりました。

姉姫はゆるやかにうねる黒髪に豊かな水を讃えた湖面のような深い翠色の瞳をした美しいお姫様でしたが、いつも何かを愁いて嘆いているので、いつしか『嘆き姫』と呼ばれるようになりました。

そして妹姫は、まるでそこだけ色素が抜け落ちたような白磁の肌に銀に輝くストレートな髪、そこだけ夏を思わせるような澄み切った天色あまいろの瞳の姉姫とはまったくちがう美しさを持つ姫でしたが、いつも氷のように無表情で、嘆き姫が嘆いても素知らぬ顔をする冷たさから、いつしか『氷姫』と揶揄されるようになりました。

姉姫である嘆き姫は、いつも何かに憂っていました。

ある時は「雨が降っているわ。このままでは兵隊さんたちが濡れてしまって風邪をひいてしまう。なんてお気の毒なのでしょう」といい、またある時は「窓辺にいるすずめさんったら、口にみみずをくわえているわ。みみずさん、尖ったくちばしで掴まれて痛いでしょうに。これから食べられてしまう運命なんて、なんてかわいそうなんでしょう」と言いました。

いつも何かを見つけたたびに「かわいそう」と話すお姫様に、周りの人たちは「お姫様はなんて優しい方なんだろう。あんなになんにも心を砕いていたのなら、いつしかご自身の心が壊れてしまっただろう。私共がお姫様を守ってさしあげなければ」と思うのでした。

そして嘆き姫が嘆くたびに周りの人たちはみな「なんてお気の毒なお姫様」といつて慰めるようになったのです。

ところが氷姫は違いました。

氷姫はそんな嘆き姫からいつも一步も二歩も下がったところで、一人なにもせず佇んでいたのです。

どんなに嘆き姫が心を痛めていても、氷姫は慰めの言葉ひとつ姉姫にかけることはありませんでした。

そんな氷姫に周りの者も構うものはいませんでした。ただ一人彼女のお付きの侍女だけはそばに控えていましたが。

さて、嘆き姫が十四歳になったときのことです。

小さな小さな国では嘆き姫の社交界デビューのための舞踏会を催すことになりました。

そこで王様は国中の腕のよい仕立て屋を呼んで嘆き姫に素晴らしいドレスを作るように言いました。

ある仕立て屋は、嘆き姫の美しい瞳に合わせたエメラルドグリーンと深緑のコントラストが絶妙なドレスを仕立ててきました。またある仕立て屋は、嘆き姫の瞳に宿った愁いを晴らすような華々しい赤をふんだんに使って仕立ててきました。そしてまたある仕立て屋は、他の仕立て屋のドレスのような艶やかさはないものの素晴らしい流線形のカツティングと繊細なフリルをふんだんに使った清楚な白のドレスを持ってきました。

嘆き姫は言いました。

「どれも本当に素敵なドレス。こんなに素晴らしいドレスを私は今まで見たことがありません。それなのにドレスを一つ選ぶなんて到底わたくしにはできません。もし選んでしまったら他の二つが素晴らしいくないなどと思われてしまうでしょう。そんなことは申し訳なくてできるはずありません。だけれど一つ選ばないといけない

なんて……私には無理ですわ」

その話を聞いていた仕立て屋たちは「お噂通り、なんて思いやりのあるお姫様なんだろう。こんなに思いやりのある姫様の心痛を取り払わなければ」と思いました。そこで

「王様。それでしたら私めのドレスはお姫様に献上させていただきます。いてもよろしいでしょうか。もちろん舞踏会にお召しただけならば幸いです」と一人の仕立て屋が申し出ると、

「王様。私めのドレスも献上いたします。そしてどうかこのドレスを舞踏会でお召しください。私めのドレスがお姫様の美しさを一層際立たせて見せること間違いございません」と言葉を添えました。すると今度は残った仕立て屋も負けてはいませんでした。

「王様。私めのドレスも献上いたします。お噂に名高い嘆き姫であるお姫様の舞踏会にお召しただければ、こんなに名誉なことはございません」

驚いたのは王様です。

それぞれに最高のドレスを作っているのです。そのドレスには途方もない金額と途方もない労力がかかっていました。

ですから、献上ではなく、王様はきちんと報酬を与えるつもりなのです。

だいたい作れと命じたのは王様です。それなのに献上されてしまつては今後の取引にも差しさわりが出るでしょう。

その時、嘆き姫のほうを見てみると、嘆き姫の扇子に隠れた口元がにやりと笑っているように見えました。心の優しい姫がこの状況で笑うなどということはないと思いなおして仕立て屋たちのほうを向きなおしました。

すると仕立て屋たちは王様の関心が自分たちに向いていないと思つたのか、口々にお互いのドレスをけなしあっているではありません

んか。

「そんなければばしい赤など、十四歳のお披露目舞踏会には全くもって相応しくはない」

「何を言う。そのドレスこそ、たしかにカツティングにおいては素晴らしい出来だと思うが、結婚式に着的る白ではないか。その色を選ぶなど愚の骨頂としか言いようがないわ」

「いやいや。その緑のドレスはいただけない。品もなければ若さも感じられないではないか。深い緑など若さの前には跪くほど重いものだということがどうしてわからないのか」

いつまでもつづく言い争いにうんざりした王様がそろそろ文句も言い尽くしただろうと声をかけよう椅子から身を乗り出しました。

すると、隣の席から悲しげな泣き声が聞こえるではありませんか。

王様の驚いた声と姫の泣き声に、喧々囂々と言い争っていた仕立て屋たちはその口をぴたりと閉じました。そして嘆き姫が自分たちの言い争いに心を痛められて泣いていることを理解したのです。

「言い争いは嫌いです。そこから何も生まれません。この争いの原因が私であるということが何よりも情けなく辛いことです。どうか今すぐこの争いをおやめ下さい」

その言葉に仕立て屋たちはお互いの顔を見合わせて、気まずさから顔を俯けてしまいました。

「それではごうしましょう。その三着とも舞踏会で順番に着たらどうかしら。どのドレスが一番かは当日まで内緒にして。けれど同じ時間分着ることにしましょう。そうすれば公平になると思うのですがいかがでしょう、皆さま方」

王様はこれにはどう返答していいか悩んでしまいました。

だってドレスは一着あれば十分だからです。

それなのに残り二着を買うとなれば、 unnecessary 経費を国庫から出さなければなりません。それはとても無駄に思えました。

しかし仕立て屋たちが言うように献上してもらうことにも抵抗がありました。

なぜならその言葉をうのみにしてしまつて手に入れてしまつと、今後はそれを持ち出して次の仕事をもらおうと仕立て屋たちが考えていることなど手に取るように分かるからです。

そこで王様は言いました。

「皆の者。今回は御苦労であつた。どれも素晴らしい出来で一着に絞るには本当に心苦しく思うが、当初の予定通り選ぼうと思う。

その白いドレス。初々しい中にも華やかさと可憐さがある、まさにお披露目のドレスに相応しいと思えるが、どうじゃ」
嘆き姫に問いかけると、嘆き姫は扇子で顔を隠しながらもこくりと頷いて見せましたので、それを了承と受け取つて王様は言い渡しました。

「ではその白いドレスで決まりじゃ。報酬はあちらにいる者が渡す故、そのままさがつてよい。御苦労であつた」

仕立て屋たちは頭を深々と下げて報酬を受け取り城を後にしたとたん、この話を家族に言つて聞かせました。

嘆き姫がどんなに自分たちのことを気にかけてくださっていたかということ。

そしてこの話は瞬く間に心優しい嘆き姫の逸話として国中に広がりました。

第二夜（前書き）

今回の話は、『嘆き姫』の第二夜から第三夜にかけての部分です。
嘆き姫をお読みの方は……ごめんなさい（爆）

第二夜

舞踏会はそれはそれは華麗に執り行われました。

近隣の国々からは王族が招かれ、十四歳の貴族の子女が社交界デビューをお祝いするために色とりどりのドレスを纏い胸を高鳴らせました。

舞踏会が開かれる城の大広間では、デビューの参加者が一人ひとり名前を呼ばれ、緊張の面持ちで入って行きました。そして最後に王女である嘆き姫の名前が告げられると、歓声が上がリ、拍手をもつて迎えられました。

白い清楚なドレスを身にまとった嘆き姫の姿は、生まれたての女神のようにキラキラと輝いて清楚で可憐でした。

会場は大きくどよめきました。

あのうわさに聞く『嘆き姫』が心だけでなく姿も美しいとわかったのですから。

貴族たちが口々に嘆き姫を褒めた立っている中、一人の美しくたくましい王子が嘆き姫の前に立ち、ダンスを申し込みました。

「私は隣国の王子スハルと申します。よろしければ一曲お相手頂けますか？」

その言葉をきっかけに、音楽隊がこの日初めてのワルツを奏で始めました。

すると王子は嘆き姫に手を差し出してにっこりとほほ笑むと嘆き姫の手を取り、大広間の中央まで歩いていってワルツを踊り始めたのです。

清楚で可憐な嘆き姫と美しくもたくましい王子が一曲軽やかにステップを踏み終わると、会場に大きな拍手が鳴り響きました。

そしてそれから皆それぞれダンスを踊り始め、大広間に色とりど

りのドレスの花が咲き乱れました。

気がつけばすでに舞踏会も終わりを迎えようとしていました。それほど王子と過ごした時間は楽しく、早く過ぎ去ったようでした。

ひと組またひと組と王様に暇を告げる者たちが増え、残すところスハル王子と嘆き姫だけとなった時のことです。

嘆き姫は悲しむことを我慢していたのでしょう。いきなりほろほろと涙を流し始めたのです。

驚いた王子はもしかして自分が姫に失礼なことを言ったのではないかと思いましたが、姫は静かに首を横に振って言いました。

「今日デビューした娘の中に、私のために作られたドレスを身にまとっているものがいたのです。そのドレスを作った仕立て屋たちに申し訳ないことを……気の毒なことをしてしまったと思って……」

声をつまらせるように泣いている姫をまじまじと見つめて、王子は問いました。

「なぜ、仕立て屋たちが気の毒だと思うのだい？」

「なぜって……あのドレスは私のデビューのために作られたドレスなのです。けれど王がドレスの出来栄を競わせるように仕立て屋たちに作らせたのでそのドレスの中から一着を選ばなければなりませんでした。とても美しく素敵なドレスでしたので、私はその中から一着を選ぶということができません。仕立て屋たちはそう言った私にあのドレスを下さると申し出てくれたのですが今度はどのドレスを私が舞踏会に着るかもめぐることが起りましたので、王がこの白いドレスを選んで仕立て屋たちをさがらせたのです。

私は私のために丹精をこめて作ってくれた仕立て屋たちに申し訳なく思うのです。

そのドレスを今日デビューした者がきているなんて、仕立て屋にとれば屈辱でしょう。本当に気の毒なことをしてしまいました」

そう言っただけでまたほろほろと涙を流し始めました。

いつもならここでそばにいる者が「なんておかわいそうなお姫様。そんなことまでお考えになるなんて情が深くていらつしやいます。どうかお心をお痛めくださいますな」と優しく姫を慰めてくれます。けれど今ここに居るのは今日初めて会ったばかりの隣国の王子でした。

スハル王子は不思議に思いました。

なぜかという、嘆き姫の言っている意味がわからないからです。ですから、ひとつ、疑問を嘆き姫に投げかけることにしました。

「姫はどういうときに心を痛めてしまわれるのでしょうか？」

すると姫は応えます。

「鳥に啜えられたみみずの痛みや、食べられてしまう不幸を思っ
て心が痛むときがあります」

そしてその時のことを思いだし、さらに涙を流したのでした。

王子は姫にまわっていた手をそっと外し、一歩さがりました。

王子の温かみを失って、そして慰めの言葉もなかったことに姫は驚き顔をあげました。

この話をすると必ず誰もが「おかわいそうなお姫様」といつてくれるのに、今日一日楽しく過ごした王子は何も言ってくれず、それどころか姫から腕を外してしまったのです。

今までこんな冷たい扱いを姫は受けたことがありませんでした。

「王子様？」

「姫。今まで誰もあなたの話を聞いて、問うた者はいませんでしたか？」

さっきまで姫を見下ろした熱い瞳とはうって違って、氷のような冷たい眼差しで嘆き姫を見る王子に、姫は心底驚きました。

「……どういう意味でしょうか」

王子の言葉の意味を理解できずに、そして急に変わった皇子の態度が不愉快で、姫はその美しい眉間に醜い皺を寄せました。

「私は今、この瞬間まで、あなたの情け深い心と素晴らしい声、心が現れたような美しい顔立ちに恋をしておりました。そして将来は我が国へと嫁いでいただきたいと心の底から思っておりますが、それはすべてまやかしであったようです」

嘆き姫は当惑しました。

なぜなら今までそんな言葉を掛けられたことがないからです。

私は思慮深く情けも深い姫なのに

その考えが眉間に刻んだ皺をより深くして、美しい顔を醜悪へとかえしました。

王子様はそんな姫の変わりようを平然と受け止めて、話を続けました。

「あなたは自分の考えが正しいと思われて、そしてそのことに対

して相手を気の毒に思っているようですが『みみずがかわいそうと心が痛みます』ですか？ではもしそのかわいそうなみみずを鳥から奪ったらどうなります？必死で見つけたらどう食料であるみみずを『かわいそう』などといって取りあげてしまつてごらんなさい。今度は鳥がおなかをすかして飢え死にしていますよ。

それに『仕立て屋が気の毒』ですか。たしかに王に選んでももらえなかったということは残念なことですが、ちゃんと他の貴族に売つて利益をあげているではありませんか。もしあなたに献上すればその時はいいでしょうが、ふんだんに高価な布や宝石をちりばめたドレスにかかったお金や労力は無駄になるわけです。たしかに王とつながりが持て、あなたともつながりがもてるかもしれませんが、同じようなことをする仕立て屋がいるわけですから結局のところ意味がありません。そしてあなたが三着ある中からどれがいちばん長く着るかでまた醜い争いが起こるでしょう。王の判断は正しかったです。

思慮深い王の元にお生まれになられた。けれどあなたは『情け深い』とはほど遠い姫だとわかりました」

姫は俯いて、その愛らしい桜色の唇を酷く噛み、わなわなと震えておりました。

けれど耳だけは王子の言葉を聴き逃すまいと澄ましておりました。

「あなたはご自分に酔っているのですね。

何をしても『かわいそう』と言って涙を流せば、そばにいる者は『おやさしい』と答え続けたのでしよう。ですが私から見ればあなたは『かわいそう』と同情されて、褒められて、崇められる、そのことに酔っている愚かな姫としか映りません。そんな愚かな姫を将来我が国の女王にまで到底できるものではありません。

今日この一日は本当に素晴らしい時間を過ごさせていただきました。あなたの社交界デビューも素晴らしいものでした。

ただ、二度と私はあなたのもとには訪れませぬ。

あなたは噂とは違う意味の『嘆き姫』なのですから」

王子はそれだけを言うと、震える姫に最後に一礼をして、王のもとに暇を告げに行かれました。そしてそのまま二度と姫に振り返ることなく大広間を後にしました。

スハル王子が大広間から去った後、嘆き姫はその場で泣き崩れました。

こんなにも酷い言葉を言われたことがないからです。

姫には王子の言っている言葉の意味がわかりませんでした。

みみずだつて命はありません。痛いのは嫌だろっし食べられるのならなおさら嫌でしょう。

仕立て屋のことにしてもそうです。

王女である姫が舞踏会、それもデビューを飾る舞踏会に自分が仕立てたドレスを着ると、貴族の娘が着るのでは『格』が違いすぎるではありませんか。

貴族の娘がデビューで一日中着るよりは王女である姫が一時間でも着ているほうがドレスの注目度が違うことですし、それを作った仕立て屋にも箔もつき格もあがるというものです。

それに献上するとまでいわれたドレスを王様は購入したのです。せっかくの仕立て屋たちの好意を無にすることですし、献上したほうが仕立て屋たちにとってもよい宣伝にもなるだろうに。そして姫はその三着のドレスが手に入るはずでした。

「やはり王子様は間違っついていらっしやる」

私の考えのほうがり理にかなってるとし、仕立て屋たちを気の毒に思

つても当然のことを思っているだけ。そのことを口にすることが違っていても思ってたっしやるのかしら。そうならば王子様はとんでもなく薄情でいらっしやるのだわ。だから私のこの思いをご理解いただけないのでしょうか。あれだけ端正なお顔立ちで立ち居振る舞いも完璧な王子様でいらっしやるというのに、なんてお気の毒なことでしょう。

嘆き姫はスハル王子を思って静かに泣き始めました。

その一部始終を見ていた者がいました。

以前から嘆き姫の『お気の毒』という言葉にうんざりしている者でした。

嘆き姫はいつも誰かに『おかわいそうに』と声をかけられて慰められていましたが、その時いつも姫の口元が笑って見えるのがずっと気になっていたのでした。

翌日の昼過ぎには、この話が城内中の噂になりました。

そうすると、なんと姫の嘆きに疑問を持っている者がつぎつぎに現れたのです。

そしてその者たちが今度は城下町に、そして城下町の者たちが国中にと話を広めていきました。

いつのまにか、嘆き姫の噂は二分化していったのです。

心が優しすぎていつも気の毒に思っていて憂いている『嘆き姫』と、誰かにいつも『おかわいそう』と言ってもらうために嘆いている『嘆き姫』。

人はよい噂よりも悪い噂のほうが好んで話すものですから、本当にあつという間にこの話はすそのまで広がり、人々に姫に対して不信感が植えられてしまいました。

『嘆き姫』の話は瞬く間に近隣の国々へと流れていきました。

第三夜

嘆き姫のデビューから三年後のことです。

今度は氷姫が十四歳を迎え、社交界にデビューすることになりました。

嘆き姫の時には国中の腕の立つ仕立て屋を呼んで腕を競わせた王さまですが、その結末があまりにもお粗末だったことに深く反省しておりました。仕立て屋たちのドレスはどれも素晴らしいものですが、女性に一つを選べなどと難しいことを言うのはやめようと思いましたし、それにドレスの色が舞踏会で話題になりすぎて翌年にちよっとした騒動も起こりましたので、デビューする娘のドレスは白と御触れをださなくてはなりませんでした。

そのこともあり、氷姫の時には初めから一人の仕立て屋を呼んでおりました。

そして仕立て屋を氷姫に会わせて言いました。

「姫に相応しいデビューのドレスを所望する」

仕立て屋は噂に名高い氷姫の仕立てなど本当は受けたくはなかったのですが、王族との取引は今後の仕事により方向に影響するだろうとそろばんをはじいたので氷姫のドレスを作ることにしたのです。ところが初めて間近で見る氷姫の姿に、仕立て屋はいたく感動しました。

煌めく銀髪、白く抜けるような肌、そして真夏の空にも似た美しい瞳。けれどもその瞳には悲しみが見てとれたのです。

十三歳の姫とは思えないほどの悲しみが。

「承りました。私の持てる技量全てを注ぎ込み、姫様に最もふさ

わしいドレスをご用意いたします」

そうして出来上がったドレスは本当に素晴らしいものでした。

余分な装飾を一切取り払い、布の織とカツティングの美しさが際立った白いドレス。裾の部分だけは二重になって箱織にしたシルクが姫の硬質なイメージを表していました。

これには王さまも満足をして、仕立て屋を褒め称え報奨を与えました。

そしてそのドレスは無益な争いが起きないように舞踏会当日まで姫に見せられることはなかったのです。

舞踏会当日。

氷姫の部屋に王様の使者からドレスが届けられました。

受け取った侍女は氷姫の伝言を使者に伝え、ドレスの入った箱を丁寧に部屋へと運びました。

氷姫の部屋へ行った使者から伝言を受け取った王様は、がっかりしました。なぜなら、氷姫のために誂えた美しいドレスを見たら、氷姫も少しは喜んでくれるかと思っただけからです。それほど使者から受け取った伝言は通り一辺倒のお礼の言葉なのでした。

ところが本当のところは違いました。

氷姫という鎧を、妹姫は纏っていただけだったので。そしてその鎧を外すのは唯一自室にいるときだけでした。

本来の十三歳の姫に戻った氷姫は、本当は感情豊かな女の子でした。

そのことを知っているのはお付きの侍女ただひとりだけです。

侍女が王さまの使者から受け取った箱をうやうやしく運び入れると、妹姫は早速箱を開けました。

そこには見たことがないほどの美しい白いドレスが入っていたの

です。

白く輝くドレスをまとった氷姫は、喜びに満ち溢れていました。なぜなら、父王が氷姫に対してこのようなことをしてくれたのは初めてだったからです。

いつもなら何を置いても姉姫である嘆き姫を優先し、氷姫は二の次でした。

ですから、姉姫の時のように国中の腕のいい仕立て屋がドレスを競うように作らなくても、初めから仕立て屋を一人呼び寄せて自分のために特別に仕立ててもらったドレスというだけで舞い上がるほどの喜びを感じました。

ただ悲しいことに、その喜びを父王に伝えることはできませんでしたが。

夜になり、続々と城に集まる貴族や、すでに滞在している近隣の王族たちが舞踏会場である大広間に足を運びいれました。

そうしてファンファーレとともに社交界にデビューする貴族の娘たちの名前が読み上げられていきました。

同じ白色ですが、どれ一つとっても違うスタイルの美しいドレスを身にまとった娘たちは、頬を上気させて入場していきました。

そして最後に氷姫の名が呼ばれ、入口からゆっくりと大広間に入っていたその時、どよめきが起こりました。

大広間にいる人の視線という視線が、入場したばかりの氷姫と大広間の上位に座る姉姫である嘆き姫を交互に見据えているではありませんか。

そしてざわざわと人をはばかりることなく大声で話し始めました。

「なんと……！嘆き姫と氷姫のドレスは全く同じものではないか

……！」

「いやいや。氷姫はデビュールらしく白だが、嘆き姫のドレスは新緑の落ち着きのある色。その点の違いはあるようだ」

「信じられないですわ。まさか氷姫がここまで慎みのない女性だったなんて……！」

「まさに。いくら嘆き姫の陰に隠れているからと言って、まさかこのような大切な席に同じドレスを所望するとは。嘆かわしいこと。姉姫に恥を書かせて何が楽しいのやら」

この瞬間。氷姫の表情は氷河のごとく凍りつきました。

だれもが姉姫である嘆き姫と同じデザインのドレスを身にまとっている氷姫を非難していました。

嘆き姫は失礼のない程度に氷姫まで走り寄ってきました。

そして誰かに聞かせるように大きな声で言いました。

「ほら。私たちのサプライズに、皆さまが驚かれましたわ。これは成功、ですわね？」

「嘆き姫。それはどういうことでしょうか」

二人の近くにいた貴族が恐れ多くもそう訊ねてきましたが、嘆き姫はその貴族を窘めることなく「これはサプライズなのです」とにっこり微笑みながら伝えました。

「みなさま。これは私と妹姫が二人で考えたサプライズです。こうして同じデザインのドレスを私と妹姫が妹のデビュールで着ることで、私たちの仲の良さを皆さまに見ていただくこうと考えたのです。驚かれましたでしょうか？」

いかにも仲のよさそうな姉妹のように手を取り合っていた二人で

したが、氷姫の表情はあいかわらず硬いものでした。

それでも大広間に集まる貴族たちは嘆き姫の言葉そのままを受け取ることにして、先ほどまでの不愉快な思い　　氷姫が嘆き姫に恥をかかした　　に蓋をしたのです。

「さあ、音楽を！」

嘆き姫の高らかな声に、音楽隊がワルツを奏で始めました。

そうして静かな怒りとともに氷姫の十四歳の記念すべき舞踏会は始まったのです。

第四夜

氷姫の社交界デビューは、悲惨なものでした。

なぜなら氷姫の着ている白いドレスと同じデザインの色違いのドレスを、『嘆き姫』が着ていたからです。

……ああ、また。

氷姫はその無表情に見える仮面の下で、そつと溜息をつきました。

本当ならばここで泣いて自室にこもればいいのですが、氷姫は感情的には動きませんでした。

もしそんなことをしたとしても、同じドレスを着るという無作法をした氷姫の失態を上手く隠した嘆き姫を好意を無にし、礼儀作法もなにもない姫だと噂され嘲笑われるでしょう。

それでなくても貴族たちの澄まし顔の下にはすでに氷姫に対する侮蔑が隠されているのです。

唯一お付きの侍女だけは慰めてはくれるでしょうが、それだけなのです。

姉姫は『嘆き姫』と呼ばれるほど、心を休める暇がないほど何に對しても優しく庇い心を砕いていました。

妹姫は感情がない人形のような表情でいつもただそこにいるだけの氷姫。

どちらの言い分を信じるかといえば誰でもが姉姫を信じることにまちがいが無いでしょう。

今この時も宮廷中の者が皆、冷たい氷姫が優しい姉姫のデザインを盗んでドレスを作ったと思っっていることでしょう。そして姉姫の機転によって妹姫の羞恥な行いをないものとして、それどころか仲の良さを見せるために二人で計画したという風に話をすり替えて妹姫の窮地を助けたと褒め称えてるでしょう。

これでまたどんなに嘆き姫が心優しく素晴らしいかという噂が国中に広がります。

そしてまたどんなに氷姫が冷たくずる賢いかという噂も国中に広がります。

姉姫の思惑通りに。

「せっかくの舞踏会を楽しまなくてはなりませんよ」

物思いに耽っていた氷姫に、嘆き姫が優しく声をかけてきました。そして、氷姫の震える手に姉姫が手を添えてました。

それは姉姫が氷姫に心を砕いて少しでも初めての舞踏会に恥をかかせないようにしているように見えました。

けれど氷姫には見えていました。

氷姫の震える手に触れたとたん、満足げに嘆き姫の唇の端があがったことが。

「お姉さま」

「国一番の仕立て屋が私たちを引き立たせる素晴らしいドレスを作ったのですもの。もっと楽しそうになさい。嬉しそうになさい。あなたの氷のような煌めく美しさがこれほどにじみ出るドレスもないものよ?」

ちくちくちく

まさに針でつつかれたような痛みが、氷姫を襲いました。

嘆き姫の言う『氷のような煌めく美しさがにじみ出るドレス』を氷姫だけではなく、色違いとはいえ嘆き姫も身につけているのです。けれど嘆き姫が着るドレスは同じデザインのドレスだというのにそれは全く違った印象を与えていました。深緑の豪華な模様を織り込んだ絹が重量感を与えつつも裾のひだが軽やかさを与えています。それはまるで嘆き姫のために考え抜かれたデザインのようでした。

あの仕立て屋は私のためにデザインをしてくれたはずなのに

恨みごとの一つでも思ってしまうのは仕方がないというものでしょう。

偶然同じデザインが、ということも無きにしも非ずですが、実際にはそのようなことはおこりえませぬ。

どう考えても嘆き姫がデザインをどうやってか入手して、自分にふさわしい色にしてもらったとしか思えませんでした。

実はもう一人、広間にいる貴族たちとは違う意味で驚いた人物がいました。

それは王座に座る、王様でした。

王様だけが知る真実は、今ここで茶番のように行われている劇物語とはまったく異なるものでした。

どうして姉姫が妹姫と同じデザインのドレスをこの日に合わせて着ているのか、全く理解できませんでした。なぜなら今日妹姫に届けるまでドレスを預かっていたのは王様だからです。ですから偶然似たデザインのドレスが仕上がってしまったのだと考えるほかありませんでした。

そんな偶然を妹姫の失態と受け取った宮廷の貴族たちを姉姫は上手く切り抜けてくれました。

最近城下で騒がれている姉姫ですが、やはり本当は妹姫思いの心優しい姫で、年齢とともに社交が上手くなってどこに出しても恥ずかしくない姫に育ったと王様は満足しました。

こうして初めての舞踏会は表向きはつつがなく終わりました。

けれど噂好きの貴族たちは今日の話を持ちかえり、家族や友人に面白おかしく話して聞かせました。

ある者は嘆き姫がどんなに情け深く妹姫の失態を覆い隠してしまつたかを語り、またある者は氷姫が感情一つ表に出すことのないうわさ通りの姫だということを語り、そしてまたある者は氷姫が思っていたものとは全く逆に嘆き姫がいかにもドレスのデザインを盗んだかということ語って聞かせたのです。

噂は相変わらず尾ひれをつけて光のごとく素早く広がっていきました。

嘆き姫の思惑も、氷姫の嘆きも飲みこんで。

第五夜

氷姫のデビュー舞踏会から数年の月日が過ぎました。

嘆き姫は十八歳、氷姫が十五歳になり、そろそろ縁談の話が周りから囁かれた頃のことです。

嘆き姫は、それはそれは見目麗しい女性に成長してありました。

美しくうねる黒髪は何もしなくてもまるで椿油を塗り込んだようにつやつやと光り輝いておりましたし、翠にけぶる瞳には知性が見え隠れしておりました。傷一つ、シミ一つない白く抜けるような肌はさらに磨きがかかり、白魚のような指先に手入れが行きとどいた爪がつるつると輝いておりました。

そして憂い顔を隠すためか、その左手には必ず扇子を持ち歩いていました。

それとは正反対の容姿を持つ氷姫も、それはそれは美しく成長しておりました。

さらさらと流れおちる髪はまるで美しい銀糸を何本も束ねたように輝いていましたし、白磁の肌は健康的に光っていました。雨が上がったばかりの夏の空をおもわせる天色あまいろの瞳は澄み渡り、ぷっくりと肉厚に盛った唇は化粧をしなくてもそこだけいつも朱を差したようにばら色に染まっていました。

二人が一緒に歩いているときは目映いばかりに光輝き、周りにいる者すべて目を奪われたものでした。

けれどよくよく見てみると、嘆き姫の影のように氷姫はいつもいたのです。

無表情の氷姫が影のように寄り添っているために、より層嘆き姫の優しさが前面に押し出ていました。

そして人は嘆き姫を褒め称え、氷姫に噂するのです。

王様が言いました。

「姉姫よ。なぜ数ある縁談を全て断ってしまうのだ？」

心優しく機転もきき、そして美しい嘆き姫には縁談話が断つても断つても後を絶つことなくやってきました。けれども嘆き姫はその縁談の釣書も肖像画も見ようともしません。

なぜなら嘆き姫にはどうしても忘れられないことがあったからです。

それは嘆き姫のデビュー舞踏会の時の、あの出来事が忘れられないからでした。

隣国の王子、スハル。

その人が言った屈辱的な言葉が今も嘆き姫を嘆かせます。

『あなたはご自分に酔っているのですね。』

何をして、『かわいそう』と言って涙を流せば、そばにいる者は『おやさしい』と答え続けたのでしよう。ですが私から見ればあなたは『かわいそう』と同情されて、褒められて、崇められる、そのことに酔っている愚かな姫としか映りません。そんな愚かな姫を将来我が国の女王になど到底できるものではありません。

今日この一日は本当に素晴らしい時間を過ごさせていただきました。あなたの社交界デビューも素晴らしいものでした。

ただ、二度と私はあなたのもとには訪れません。

あなたは噂とは違う意味の『嘆き姫』なのですから』

「違う」、嘆き姫は思います。

わたくしは人よりも敏感に人の辛さがわかるだけ。わたくしは人の心を理解しようといつも努めている。わたくしはこの誰より愛しみの心を持っている。わたくしは……、わたくしは……っ！

あの日以来、嘆き姫の心に安住の場所はありませんでした。

安寧を求めて城下にお忍びで遊びに行つては、噂話に耳を澄ませました。

するといつも二通りの話が飛び交うのです。

『何に対してもお優しく心を砕いてくださる嘆き姫』という噂と、悦に浸りたいがために嘆き悲しむ嘆き姫』。

自分をほめたたえる言葉を聞くと心に大きな羽が生えたように軽くなつていきましたが、そうでない言葉を聞かたびにどうにかしなければと思ひ城に急ぎ帰ります。

そして自分が本当は素晴らしい心の持ち主なのかということはどうやって国民に知らせることができるのかと考えます。

スハル王子の言うような酷い姫ではないと思つていますが、果たして本当にそうなのか。

嘆き姫はあれ以来、自分を見出せなくなっていました。

気がつけば自分は結婚してどこかの国の王妃として一生を終えていいのだろうかと自問自答していることが多くなつてしまい、どうしても縁談に踏み切ることができませんでした。

それに、あのスハル王子にこそ、自分の伴侶に願っていたのです。

姉姫が結婚をしないのに妹姫に縁談などもつてのほかだというこ

とで、氷姫には十五歳という適齢期ながら縁談話が氷姫まで話が届かず、王様はいつも話をそらしていました。

氷姫は氷姫で自分の世間での評価が低いことなど重々承知しておりましたので、縁談が来なくても不思議とは思わず、このままこの国のこの場所に居続けるか、王女として人質の価値はありましたのでどこか強国の奥宮へと行くことになるかと思っております。そしてそれは時間の問題だろうとも思っていました。

そんなある時、姫の国に国力なしと見定めた隣国が攻め入ってきたのです。

第六話

予告も何もなく攻め入られる。

あちこちで悲鳴が上がる、家が燃える、人が殺される。

隣の国の軍勢が段々と城に近づくとともに、瓦礫の山が積み重なっていきましました。

小さい小さい国でしたから国境周辺をいつも警戒していたはずだったのに、どういいうわけか国境を越えてすぐと言っていいほどに城下町に軍勢が押し寄せました。

とうとう城に軍勢が到達をするだろうというとき、二人の姫はお付きの侍女たちと一緒に隠し部屋に逃げ込みました。そこで侍女たちとともに恐ろしさに震え、悲しみに涙していました。

どうして隣国はこんな意味のないことをするのかしら
こんな嫌な思いをしなくてはならないなんて、私たちはなんて酷い星の下に生まれてしまったのかしら

嘆き姫はそう言って泣き崩れ、周りの者たちの同情を一身に集めておりました。

その後ろに控えていた氷姫は、このような状況に置かれてもただ無表情に冷たくそこに立っていました。そんな氷姫を嘆き姫のお付きの侍女たちは侮蔑して氷姫の存在を無視していました。

叫声とともにどかどかどかどかと力強く城を歩く音が聞こえてくると同時に、姫と侍女たちが隠れている部屋の扉が大きく開きました。

嘆き姫と氷姫を庇いながら侍女たちが恐怖に震えその扉を叩くと、

そこから光を背にした一人の男が何かを投げ入れて寄りこしました。

光を背にした男は、成長し、隣国の王となったスハルでした。そして投げ入れられたものは、父王の生首だったのです。

部屋のあちこちで切れた息遣いと悲鳴が上がりました。

そんな中、嘆き姫は恐れをしないように侍女たちをかきわけゆつくりと前に進み出て、その父王であった生首を両手で持ち上げて額にキスをしました。

「なんておかわいそうなお父様。このような姿になってしまわれ
て……」

はらはらと、姉姫のふせた目から涙がこぼれおちました。

それをじつと見ていたスハル王は、高らかに笑いだしました。

「何がおかしいのです。父王をこのような姿にかえた者が」

「いやなに。そなた、かわらぬな。年を重ねて少しは変わったか
と思うておつたが、情けないほどに昔のままの『嘆き姫』よ」

あの舞踏会で味わった冷たい眼差しよりもさらに見下され、わな
わなと屈辱に震える姫にスハル王は話しかけました。

「そなたが少しでもその愚かさから成長しておれば、このよ
うな日も迎えることはなかっただろうに」

聞き捨てならない言葉に、父王の生首を落とした姫が笑うように
叫びました。

「わたくし？わたくしのせいとでも？」

「そう言っているのだが、そのように聞こえぬか？」

「わたくしは何もしてなどおりません！」

「そう。そなたは何もしてなどおらぬよ。ただ、そこにいて何かの愁いを見つけては自分の徳になるように話を紡いで嘆いているのみ。そして周りの者から『おかわいそうに』と慰められて、もてはやされては悦にはいつているだけであろうよ。そして己が嘆きをより強く見せるために心のない氷姫を従えて歩き回る、ずうずうしくあくどいという言葉がふさわしい行いをする女よ」

「そのようなこと　！」

「ない、と申すのか？ではそこにいる侍女に確かめてみてはどうだ？そやつは今視線を外したではないか。その後ろにおる者もそうであろうよ。我に怯えるのではなくそのことを指摘されることに怯えているではないか」

姫が後ろに控えている侍女たちをちらと見ると、スハル王の言うように二人とも姫と視線を合わせようとはしませんでした。もちろん氷姫の侍女たちも。

「それにこの首の王がかわいそうだといったな？本当にかわいそうなのはいったい誰かわらぬか」

スハル王は王の首を落とせばかりの血糊のついた刀を姫に向けて、必ず答えるように促すと

「……父を亡くしたわたくし、ですか……」

「馬鹿なこと！そなたなどかわいそうであるわけがなかるう。それで言うならばまだ氷姫のほうが幼く、かわいそうというに相應しいではないか。やはり『嘆き姫』のあだ名は伊達や酔狂ではないとみえる。誰がかわいそうか。それはこんな愚かな王と不愉快な姫を仰がなければならなかった国民よ。王が昔のままの王であったなら、

そなたが少しでも心入れ替えたのならば、このような戦火の渦に巻き込まれなくともすんだものを」

「なにを……！戦争を仕掛けておいて何を戯言をいわれるのですか！」

「仕掛けたとも。今が勝機。愚かにも娘の性分に惑わされ、国民の信頼が遠のいた王室など、もろい。この国の国民が流民となつて我が国に流れ込んできているとゆうに、その娘にも見放された床に転がる王は何もせぬ。動かぬ。だからこそ我が国が動いたのだ」

スハル王の見る先には、さきほど嘆き姫の手からこぼれ落ちた父王の首がありました。

父王の澱んだ瞳はまるで自分を責めているように見えた姫は、思わず両手で顔を覆いました。

「そなたがそのような性分だからこそ、この国の王まで近隣諸国から見下されるのよ。そなたの性癖を直すことも、国民を二分化するほどの噂を沈静化することもできぬ王に、国を動かす正当な判断ができるはずもない。近頃ではこの国の王は子煩悩に目がくらんだ愚か者として名高いことを、そなたは知っているのか？」

初めて聞く話に驚いた姫は、真のことかと周りを見回してみても、誰も姫に返答する者はいませんでした。それどころか誰一人姫を見ようとはしなかつたのです。

それほど姫は周りの者から信頼されていなかったということに今さらながらに気付いたのですが、それはもう遅すぎたのです。

姫の嘆きによって、職を追われた者がいました。

姫の嘆きによって、質素な生活を余儀なくされた者がいました。

姫の嘆きによって、人とかかわることに恐怖を感じる者がいました。

権力があるものがその時ばかりに耳触りのいい言葉を紡いだおかげで、悲惨な目に会う人がどれだけ多かったことか。

スハル王は、最後に一言言いました。

「嘆き姫よ。その名の通り嘆き悲しめ！」

そうして父の血が乾かぬうちに、同じ刃で嘆き姫も父の後を追いました。

スハル王は、血をぬぐうために大きく刀を振り上げて、一振り下ろしました。

刃の先には父王に添うように嘆き姫の醜く歪んだ顔が並んでおりました。

王が二人の首をそのままに、部屋から出ていこうとした時のことです。

「お待ちください」

震える赤い唇を噛み締めて、一人の美しい姫が血にまみれた生首の横に立っていました。

まだ幼さののこる銀色の髪の姫
嘆き姫とともに噂された
冷たい氷姫に間違いありませんでした。

「わたくしも、この国の姫。この国を傾倒させた王の娘としてその刀に色を染めるのは当然だと思いますが、その前に一つだけお教えいただけますでしょうか」

スハル王は、驚きました。

なぜならスハル王が調べさせた氷姫という人物は、感情がないただの見かけのよい人形であり、嘆き姫の格好の餌食だったからです。

ところがどうでしょう。

豊かな愛情を保障する、ぽってりとしたつややかな唇を、目の前で起こった悲劇に流されまいと血が出るほどに噛み締めていました。そして透き通る空色の瞳には知性の光が宿っていました。

報告書には書かれていない氷姫を少しだけ垣間見たような気がしました。

そこでそのまま打ち捨てるか混乱に任せて投げ捨てるかと考えていた氷姫の処分を据え置き、自分の愚かさを対価に氷姫の話を聞いてみることにしました。

「申してみよ」

「ありがとうございます。……国王も世継ぎ姫である姉姫も身罷られました。私が死ねばこの国の王制は終わりを告げます。その後のこの国をどうされるおつもりか、ただそれだけをお教え願えませんかでしょうか」

「そなたの死後のことなぞ、なぜ死を前にして知りたく思うのだ？」

「国王一家に罪はありません。国を傾倒させ、自国民を流民とし、それを止める手立ても打つことができませんでした。ですのでわたくしは死を受け入れる所存ですが、この国の民に罪は何一つございません。……できれば父王と姉姫、そして私の首をもってなにとぞ国民に温情をお与え願えませんかでしょうか」

スハル王は、百聞は一見にしかずだと思いました。そして氷姫に対する評価を改めました。

「そなた、我が后となるか？」

十五歳という氷姫の年齢は、二十五歳のスハル王とはたしかに年が離れていますがおかしくはありません。それに美しい容姿に十五という年齢にして目の前で肉親が殺されたというのに取り乱すどころかわが身を投げ出して自国民の処分に温情を願うことができるその精神。

スハル王は王妃に相応しい女性を、最も王妃に相応しくない姫が生まれた国で見つけました。

「……なぜです。わたくしは敗戦国の姫です。この身はすでに王の手の上。この場で殺そうが、死ぬまでで後宮に留めておこうが王の身心ひとつで決まります。それを後に望むなど、聞いたことはありません」

「たしかにそなたの言うとおり、そなたの運命は我が手にあるも等しい。だが、そなたのその聡明さは後宮にあるべきではない。その慈悲深さは自国民を持ってこそいかなく発揮されるだろう」

「わたくしに選択権などないはずです」

「そうだ。まったくない。けれどそれでも選択させてやろう。我が妻となるか、死をもって国民に詫げるか」

その言葉に一瞬ひるんだ氷姫でしたが、しばらく考えた後、答えを導き出しました。

「敗戦国の王女であるわたくしが后となるには後ろ盾も何も無い状況ではあり得ないと思います」

「その言い方では後ろ盾があれば妻となると言っているようなものぞ」

「いえ。できれば父王や姉姫と同じく、この場で斬首してください」

い。それがこの国を戦火に巻き込んだ王族の最後に相応しいと思います」

「よくぞいった!」

そうして氷姫は隣国の王スハルに望まれて后となり、公平で慈悲深い王妃と国民から慕われ、一生を幸福に暮しました。

では氷姫の国はどうなったのでしょうか。

スハル王は氷姫が望んだとおり、腐敗した貴族を罰したのみにとどめ、国民が戦火で餓えることなく暮らせるように配慮して、以前の繁栄を取り戻していきました。

氷姫は何よりもそのことを喜んでいたそうです。

《おしまい》

第六話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

もともと『嘆き姫』を描いている最中に妹姫がいたらどうなるかという思いつきで生まれたお話です。氷姫と嘆き姫の確執をもう少し具体的に描けばよかな？とか思ってみたりもしています。

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346v/>

氷姫 『もうひとつの嘆き姫』

2011年8月6日00時45分発行